



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	「女性作曲家と社会」についての研究発表と報告
Author(s)	フランケ, クラウス
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(65): 157-176
Issue Date	2021-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47909
Rights	

「女性作曲家と社会」についての研究発表と報告

クラウス・フランケ

1. はじめに

2019年（令和元年）11月10日（日）「音楽と社会を繋ぐレクチャーコンサート『きっかけ』～マイノリティーを乗り越えて～」という企画をし、宜野座村文化センターがらまんホールにて多くの来場を得て成功裡に終えた。この企画は簡単な言い方をすればコンサートであるが、音楽鑑賞会にお話し・ダンス・映像・朗読などを加え、分かりやすく楽しく味付けした舞台、というべきだろうか。

「女性作曲家と社会」というテーマは、3部構成から成る「音楽と社会を繋ぐレクチャーコンサート『きっかけ』」の第1部として披露された。筆者は、沖縄において継続的にドイツ文化を紹介する企画を催しているが、本企画もその一環として琉球大学の学生と共に研究し作り上げた舞台である。学生たちの研究成果は想像していた以上で、集めた研究素材の膨大さ、素人とは思えない舞台上での発表姿勢を高く評価し、記録として残しておきたい。

2. 「女性作曲家と社会」について

ヨーロッパにおいて、19世紀は女性が芸術家として活躍できる社会ではなかった。色々な才能を秘めながら、芸術的能力を開花できた女性はわずかで、名を残すなどということは不可能に等しかった。しかし、そんな時代にも密かに芸術的才能を書き残してきた女性たちがいた。現在においてようやくそのような女性についての研究が進み、様々な情報を収集することができるようになった。本企画はその女性作曲家の音楽を取り上げ、当時を振り返る機会「きっかけ」とするものである。

2. 1. 主な全容と準備

本舞台企画の「女性作曲家と社会」の中では、19世紀の3名の女性作曲家によって作曲されたドイツ歌曲と、フランスの室内楽作品がプロの演奏家によって生演奏された。有名なのは西ドイツ時代のドイツ100マルク紙幣に印刷されたクララ・シューマンであるが、それに加えてファニー・メンデルスゾーン、ルイーゼ・ファランという計3名の女性作曲家を取り上げた。この3名の作曲家に関する資料が比較的多いことに起因する。琉球大学法文学部国際言語文化学科ヨーロッパ文化専攻ドイツ言語文化コースに所属する3名の女子学生は、それぞれ一人の作曲家を研究課題として受け持ち、作曲家の経歴や作品、さらに19世紀ヨーロッパの歴史・文化・芸術的傾向などを自主的に調べた。調査結果を授業で発表し、舞台披露される演奏曲目に合致する内容を取り出し、さらに深く調べた。ドイツ歌曲の歌詞を読み、CD録音を聴き、詩人について調べることで予備知識を増やした。その後、曲目解説としての脚本を書いた。作品説明と演奏を繋ぐこの脚本は、学生自身が舞台上に立ち朗読した。つまり舞台出演者の役も担ったわけである。また観客が視覚的にも理解できるようにパワーポイントを用意しスクリーンに投影した。

音楽鑑賞した後は、パネルディスカッションのコーナーを設けた。学生が主体となり、会場の観客とともに「女性」や「社会」を通じたコミュニケーションを試みたものである。19世紀の女性と現代の女性で共通する点、改善された点、過去から現在に至るまで残された課題等を観客に提示し、社会を振り返る「きっかけ」を観客に問いかけた点は、特筆に値すると言える。

2. 2. 「女性作曲家と社会」の舞台プログラム

本プログラムは以下の①—⑤から構成される。

- ① Fanny Hensel-Mendelssohn(1805-1847) ファニー・ヘンゼル - メンデルスゾーン作曲
Nachtwanderer (Joseph von Eichendorff) op.7-1 夜のさすらい人

Nach Süden (Wilhelm Hensel) op.10-1 南へ

Bergeslust (Joseph von Eichendorff) op.10-5 山への憧れ

Die Mainacht (L.H.C.Hölty) op.9-6 五月の夜

② Clara Schumann(1819-1896) クララ・シューマン作曲

Er ist gekommen in Sturm und Regen (Friedrich Rückert) op.12-2 あの人は嵐と
雨の中をやって来た

An einem lichten Morgen (Hermann Rollet) op.23-2 ある明るい朝へ

Sie liebten sich beide (Heinrich Heine) op.13-2 お互い愛していた

Ich stand in dunklen Träumen (Heinrich Heine) op.13-1 わたしは暗い夢の中に
立っていた

③ Johannes Brahms(1833-1897) ヨハネス・ブラームス作曲

Meine Liebe ist grün op.63-5 わたしの愛は緑色 (Felix Schumann)

④ Louise Farrenc(1804-1875) ルイーズ・ファラン作曲

Trio pour Piano, Flûte et Violoncelle op.45 フルートとチェロとピアノのため
のトリオ作品 45、全 4 楽章。

⑤ パネルディスカッション「女性と社会について」

①、②、③でソプラノを担当したのは、宮平真希子、ピアノ伴奏は東江貴子である。④では金城まみ子がフルート、上原玲未がチェロ、東江貴子がピアノを演奏した。琉球大学の在在学生による発表は、①高良琉海子、②③森麗華、④西平絢音、そして⑤については西平絢音、森麗華、高良琉海子の3名が担当した。その他にも、パネラーとして琉球大学の在学生在が参加し、ゲストとして、琉球大学博士課程留学中のムアサル・ダヴォディが共に発表の準備を行った。

3. 「女性作曲家」たちについて

本節では学生の発表原稿をもとに、3人の女性作曲家の生涯について概説する。初めに、ファニー・ヘンゼル-メンデルスゾーン Fanny Hensel-Mendelssohn (1805-1847) に関する発表者Aの脚本全文を引用する。

フェリックス・メンデルスゾーンという作曲家をご存知ですか。彼の有名な作品は今お聞きいただいた結婚行進曲で、これからご紹介するファニーの実の弟でありピアニスト、作曲家でした。ここで一つ疑問が生まれます。彼の音楽を知る人はとても多いのに対し、なぜ実の姉であるファニーの存在は今日まであまり知られていないのでしょうか。今日は彼女が作った曲をお楽しみいただきながら、同時に女性音楽家であるファニー・メンデルスゾーンについて一緒に考えて頂けたらと思います。ファニー・メンデルスゾーンは19世紀のドイツに生まれました。作曲家としての才能に秀でており、41年の生涯のなかで500近く作曲をしました。それにも関わらず、ファニーの作品は今日に至るまであまり評価されていませんでした。なぜなら、実は彼女は公に作曲することはできなかったからです。ファニーは家族である父にさえ隠れて作曲をし、完成した曲を出版せず机にしまうという生活を送っていました。

<19世紀のドイツ>まずファニーを紹介するうえで、彼女が生きてきた時代背景をご紹介したいと思います。19世紀のドイツでは、女性は家事をすること、男性を立てることが最も素晴らしいとされていました。そのためファニーが偉大な作曲家であったことを父や弟のフェリックスは認めませんでした。また、家族だけでなく社会的な要因もありました。当時のベルリンは女性の芸術家の解放運動を制限していたため、出版物に対しての検閲が厳しく女性の作品は出版が許されませんでした。実際、頻繁ではないですが、彼女は自分の作品を出版しましたが、彼女自身の名前ではなく、弟フェリックスの名前で出版することになりました。社会活動に参加することもできず、彼女にとって当時はとても暗く苦しい時期となってい

ました。父親アブラハムがファニーに当てた手紙に次のように記されています。

「音楽はフェリックスにとっては職業になるかもしれない。だがお前には、音楽は所詮は飾りにしかならずお前の存在や行動の基盤には決してなりえないし、そうするべきでもない。」

<ユダヤ人の家庭>ファニーは決して貧しくて音楽ができなかったわけではなく、むしろとても裕福な家庭で暮らしていました。父は銀行を営み、王宮にお金を貸すほどの力を持った人物でした。しかしファニーが作曲家として活躍できずにいたもう一つの理由として、ユダヤ人の厳格な家庭で育ったことも挙げられます。当時、ユダヤ人は社会から外れた存在だとみなされていました。ファニーらの祖父の時代にはユダヤ人はベルリンに入る際に家畜と同じ門をつかっていたほどです。そのため父は子供たちがドイツ社会から認められるよう生活から勉学に至るまで厳しく教育をしていました。だからこそ社会に反して芸術活動をするファニーは、家族によってその活動を妨げられ続けたのです。

<二年間のイタリア旅行> 1839年から二年間にわたるイタリア旅行で彼女に素晴らしい転機が訪れました。実は以前から彼女は南の国に強いあこがれを抱いていました。彼女はイタリアにてローマ留学中であったシャルル・グノー少年と出会いました。彼は女性に対する偏見は一切持っておらず、ファニーに対して特に尊敬の意を表しました。二人は互いを尊重し合い、その間には素晴らしい友情が生じていました。グノーはファニーの作品を賞賛し彼女に勇気を与え続けました。彼の絶賛により、彼女はもう一度作曲を始めることができたのです、憧れの南の国で。

<最期> イタリア旅行で得たインスピレーションを糧に、数々の傑作が生まれました。父に従い、弟フェリックスを立ててきたファニー。残念ながら、多くの傑作は日の目を見ることはありませんでした。しかし彼女の死

が訪れる一年前の 1846 の夏は彼女の人生の中で輝かしい夏だったと言えるでしょう。彼女は彼女の作品を世に出すことを決め、出版社にオファーを申し出るなど精力的に活動しました。しかし彼女がそれらを楽しむ時間は多く残されていませんでした。翌年五月、ファニーは脳卒中に倒れ 41 歳という若さでこの世を去りました。亡くなった当日にピアノの上に置かれていた曲“山への憧れ”。死の前日、彼女は夫にこんな言葉を残しています。

「Ich bin so glücklich, wie ich es nicht verdiene」

「取るに足らない存在だけど、幸せよ。」

想いも歌も天に届く…五月のファニーの死から半年後、不思議なことに弟のフェリックスも姉のあとを追うようにこの世を去りました。ファニーの才能をきちんと認めてはいなかったものの、姉の死は彼にとって計り知れないショックだったのでしょうか。ふたりはいつも一緒。いつまでも忘れられない五月の心の月を探して、あとを追うように・・・。

次に、**クララ・シューマン Clara Schumann(1819-1896)**に関する発表者 B の脚本全文を引用する。

ドイツ・ロマン派を代表する 19 世紀の音楽家、ロベルト・シューマン。『子供の情景』など、数々の名曲を世に送り出しました。日本においては、特にいまお聞きいただいたトロイメライがよく知られており、クラシック音楽にあまりなじみのない方にも聞き覚えがあるのではないのでしょうか。彼、ロベルト・シューマンの名声は全世界にとどろいていますが、その妻、クララ・シューマンは、日本ではクラシック音楽を愛好する人々の間で知られているにとどまっています。

今日は、「19 世紀に生きる女性」という観点からみたクララの一生について、彼女が生み出した名曲と共に解き明かしていきましょう。クラシック音楽界を代表するおしどり夫婦として知られたロベルトとクララ。二人が出会ったきっかけは、当時ピアノの教師をしていたクララの父・フリードリヒ・ヴィークのもとに、シューマンが師事したことでした。クララは

当時すでに名ピアニストとして知られており、12歳の頃にはヨーロッパ中を飛び回りその腕前を披露していました。クララの才能には、オーストリア皇帝フェルディナンド1世や、詩人のゲーテも賛辞を贈ったほどでした。娘の才能を後押しする父フリードリヒ・ヴィークは、娘が貧乏な弟子ロベルトと恋仲に堕ちることに猛反対でした。反対されればされるほどロベルトとクララの愛は深く、より情熱的になっていったのです。当時家柄に格差があったクララとロベルト。二人の恋路には様々な困難が待ち受けていましたが、紆余曲折の末、1840年に結婚し、幸せを手にすることができました。

ここで、ロベルト・シューマンの『ピアノ協奏曲イ短調』をすこしだけお聞きいただきたいと思います。結婚の翌年にロベルトがクララのために書いた作品、『ピアノと管弦楽のための幻想曲』にさらに手を加えてまとめたものです。

いかがでしょうか。実は、この曲の第一楽章第一主題の中に、ロベルトのクララに対する愛情が隠されているのです。木管楽器の主題はドシララ、という音で始まりますが、これはドイツ語の音階ではCHAAとなります。クララをイタリア語読みにする则ちChiaraとなり、その名前が楽譜の中に隠されていることとなります。このメロディは第一楽章の中で、クララへの「呼びかけ」という形で何度も現れます。この幸せの絶頂期のクララとロベルトは、沸き出でる清水を汲むように、たくさんの歌曲を書き留めました。明るい笑いと愛に満ち溢れた日々が続き、優しさが生まれましました。このように長年の間、二人の愛は晩年にシューマンが46歳でこの世を去るまで深く長く続いたものだと信じられてきました。しかしなんと、最近の研究で、実は彼らの結婚生活の中に暗い影が差していたことが徐々に明らかになってきたのです。クララの豊かな才能は、19世紀ヨーロッパの社会と、結婚や妊娠という家庭生活の中で、強く抑圧されていたのです。ひどく神経質だったロベルトは、作曲中に音が聞こえてくる環境を嫌いました。そのせいで、クララは14年の結婚生活の間、夫に気を使い続け、罪悪感の中で、ピアノの十分な練習ができない環境にいました。

そのせいで、常に才能を失ってしまう恐怖と戦い続けなければなりませんでした。クララはこう残しています。

「音楽は私の人生の大部分をしめており、音楽を欠いた私は、身も心も張り合いがなくなってしまう」

さらに10度も妊娠したクララは、当時の高い妊産婦死亡率のなかで、常に死の恐怖とも戦うことになりました。クララにとって厳しい結婚生活が長く続いたせいで、彼女のロベルトに対する愛情は次第に薄れていきました。ロベルトについても、新事実が明らかになってきました。彼は晩年橋の上から投身自殺を図り、精神病院で最期を迎えます。長年精神病を患っていたと信じられてきましたが、近年、彼のカルテが発見され、その内容から実は別の診断がなされていたということがわかりました。ドイツ語では *Alkohol delirium*、ラテン語では *Delirium tremens* というのですが、アルコールを日常的に摂取している人が急にやめたときに起こる、せん妄を伴う禁断症状のことです。幻覚、幻聴、震え、意識の混濁などが2週間程度続き、その後徐々に回復に向かいます。現代では、この段階に至る前に治療がなされるため、あまり見ることがない重度な状態です。ロベルトの *Alcohol Derilium* の禁断症状は、精神病として誤診されてしまったのです。それにもかかわらず、クララはロベルトを精神病院に入れ、ロベルトは回復後もそこでうつろな日々を過ごすことになりました。ロベルトはほとんど誰とも面会を許されず、孤独の中でうつ状態になっていきます。彼は一人、暗い夢の中に立ちすくんだまま希望を失ってしまったのです。クララ・シューマンは、ロベルトを深く尊敬していたブラームスと深い関係にあったことでも知られています。日本のクラシックファンの間でも有名な話ではないでしょうか。男女の仲にまで発展していたとする説は現在でもささやかれています。二人の関係を推し量る手がかりは、わずかに残されているに過ぎません。しかし、クララの息子である詩人・フェリックス・シューマンの詩にブラームスが曲をつけていることや、二人の肖像がとても似ていることなど、まったく根拠のない話ではなさそうです。

ロベルトが精神病院に入ったあと、クララはブラームスと共に過ごしま

した。そして、ロベルトに面会することは一度もありませんでした。現代の価値観からすると、彼女は薄情に見えるかもしれません。しかし、離婚が女性にとって大きな社会的デメリットとなる当時では、夫の抑圧から逃げる方法はとても限られたものでした。彼女の逃れられる道はこれだけしか残されていなかったのです。

以下では、**ルイズ・ファラン Louise Farrenc(1804-1875)**に関する発表者Cの脚本全文を引用する。

19世紀ロマン主義音楽の時代は、バッハやベートーヴェン、シューベルト、シューマンなど現在でも名を馳せている男性音楽家が活躍していました。ここでは、その中でも数少ない女性音楽家として、人知れず活躍した三人の女性音楽家の一人、ルイズ・ファランを最後にご紹介したいと思います。ルイズ・ファランは1804年パリの美術家の両親の下で生まれました。彼女は幼少期にピアノを習い、15歳の時にはアントニーン・レイハの下でパリの音楽院にて作曲と音楽理論、楽器法を習うなど、先ほど紹介した同年代のファニー・メンデルスゾーンやクララ・シューマンに比べ、幼少期からとても恵まれた環境で育ちました。そして1821年には、フルート奏者の楽譜出版業の夫、アリストイド・ファランと結婚しました。楽譜出版業で働く彼は、彼女の作曲活動を献身的に支えました。そして、5年後には一人娘のヴィクトリーニを出産しました。また、1834年には自身の最初の管弦楽曲を発表し、『ロシアの歌による変奏曲 *Air Russe Varié*』はロベルト・シューマンに絶賛されるなど、輝かしい音楽家としての人生を送ります。その後も、彼女は1842年にはパリ音楽院ピアノ科の教授に就任し、その後約30年間もの間、女性教授として活躍しました。女性が音楽家として活躍するのが珍しいこの時代で、同音楽院で彼女は唯一の女性教授でした。しかし、当時の女性の社会的地位はまだまだ悪く、教授と言えども補助職員並みの給料しか得られなかったため、八年間もの間、男性教授並みの給与を求め続け、男女平等を謳い、ようやく女性教授としての権利を勝ち取りました。1849年には、『交響曲第三番作品

36番』がパリ音楽院管弦楽団によって上演され、自身最大の成功を収めました。そして、彼女は同大学で1872年まで、約30年もの間女性教授として勤め、当時のヨーロッパの中で最も偉大な女性音楽教授の一人となりました。その後も音楽家、女性教授として活躍し続けた後に三年後の1872年にパリの郊外でひっそりと亡くなりました。彼女の死はあまり大きな注目は浴びなかったものの、彼女の生涯はこの時代の女性音楽家、また女性音楽教授として、音楽は女性が輝ける場所であると世間に確信させたのでした。

4. 女性の権利に関する運動について

1918年11月ドイツとオーストリアで女性参政権が導入された。ドイツでは、1918年11月12日に人民代表委員会政府で認められた。1918年11月30日には、帝国選挙法によって女性に参政権と普通選挙権が与えられた。1919年1月19日に初めてドイツ国民議会選挙における女性の投票、そして立候補が可能となった。今年、ドイツにとっては民主主義101年を意味する。それ以前は国民の半分、要するに女性が除外されていたので民主主義も存在しなかった。女性が選挙権を獲得し国家の設計図が根本的に変わった。女性の声なしには現在の福祉国家への道りはなかった。母性保護・年金制度・労働法改善・賃金問題・幼稚園・少年保護法などである。女性の権利の拡大とともに社会全体が改善へと進んだ、と言ってよからう。

100年後の2018年、世界の至るところで女性が街頭に立つ姿が見受けられた。スペインでは国際女性デーに600万人規模の女性ストライキが起こるなど、世界中で男女平等の闘いは続いている。性的ハラスメント、パワーハラスメント、賃金格差、政治参加、自宅介護、子育てないし育児支援への改善のためである。女性平等の闘いは人権獲得、つまり女性が人間として認められるための戦いである。女性は少数派ではない、世界人口の約50%を占めている。例えばドイツの場合、女性は男性より21.5%収入が低い、管理職に就く女性の割合は29%、毎日子どもの世話をする女性は88%、男性は64%である。また、毎日料理や家事をする女性が72%であるのに対し、男性は29%に留まっ

ている。

5. パネルディスカッションについて

パネルディスカッションに関しては、学生たちによって2種類の台本が用意された。1つ目は、ゲストとして出演するアフガニスタン出身のムアサル・ダヴォディさんを中心としたイスラム圏での女性の生活習慣を多角的に紹介する、という異文化理解型シナリオであり、2つ目は会場の観客の意見を引き出す参加型シナリオである。しかし、本番数日前に留学生ムアサル・ダヴォディさんが急用でアフガニスタンに帰国してしまう事態が生じたため、直前になり3つ目のシナリオを考案した。以下では最初に使う予定だったシナリオを紹介する。

N: 申し遅れましたが、ここで私たちの自己紹介をさせていただきます。

琉球大学ヨーロッパ文化専攻の西平絢音 (N) です。

M: 森麗華 (M) です。

T: 高良琉海子 (T) です。

N: 今回はこの三人と、アフガニスタン出身の Mursal (Mu.) さんをゲストに迎え、女性と社会についてのパネルディスカッションを進めていきたいと思います。Mursal, could you please introduce yourself?

Mu.: (自己紹介)

M: アフガニスタン出身で、現在琉球大学工学部で博士号取得のために留学されている Mursal さんです。後ほど彼女自身や、アフガニスタンでの女性と社会についても質問させていただきます。

NMT: よろしくお願ひします。

N: 先ほどご紹介した Louise Farrenc も、自身が大学教授として働く際に、男女間の労働賃金の不平等に異議を唱え、8年もの間抗議活動をしていました。今日の日本でも働き方改革や、女性の労働環境などが見直されつつあります。まずはこれから、女性の労働環境についてお話しさせていただきたいと思います。

(OECD、男女間労働賃金差のグラフを出す)

N: これは OECD の各国の男女間における労働賃金の差の割合を示したグラフです。この中では日本は、韓国に次いで2番目に男女間で大きな労働賃金差があります。

M: この%はなにを表しているんですか？

N: この%がおおきいほど、男女間の賃金格差が大きいうことを表しています。

T: 思っていたより結構賃金差があるんですね！

M: そうですね。また、この中を比べてみるとヨーロッパは男女間の賃金差がそれほど大きくないということがわかりますが、いかがでしょうか？

N: そうなんですよね。この3人はドイツに1年間の留学経験があるのですが、その際にヨーロッパの女性の労働環境について何か気づいたことはありますか？

M: あ、そういえば、私の通っていたデュッセルドルフ大学の敷地内には、学生や教職員向けの託児施設がありました。子供のいる女性でも、勉強したり働いたりしやすいのではないかと思います。

T: 私の通っていたハンブルク大学にもありました。

N: そうですね。そういえば私の時も、講義の際に子供を連れてきている人もいましたね。ヨーロッパは子育てについての環境が日本より整っていると感じました。

そこで、観客の皆さんにもお聞きしたいのですが、この中で働いている・働いていた女性、または、奥さんが働いているという男性はどのくらいいらっしゃいますか？もしよろしければ拍手をお願いします。

(拍手してもらう)

NMT: やはり結構いらっしゃいますね。

N: また、お子さんがいらっしゃる方は、働きつつ子育てする中で困ったことや、やりづらかったことがあると感じた方はどのくらいいらっしゃいますか？拍手をお願いします。

(拍手してもらう)

NMT: やっぱりそうですね。

N: ちなみに、働きながら子育てをすれば、旧東ドイツにはこのような施設がありました。

(旧東ドイツの保育園のスライド)

N: こちらをご覧ください。こちらは旧東ドイツの託児所、KITA です。社会主義の旧東ドイツでは、労働力が不足しており、必然的に女性も働かなければならない環境だったんです。そのため、国がまず、託児所などを設けて、女性が働きやすい環境を作ったんです。ちなみにこのころの待機児童はほぼいなかったそうですよ。

T: 日本でも待機児童などが問題になっていますし、見習うべきところがありますよね。子育てしながら働ける環境をもっと国が積極的に整えるべきだと思います。

M: そうですね。あ、ちょっと質問があるのですが。私はこの間1か月ほどフランスにいたんですけど、そのときに街中で男性が子供を散歩させていたり、抱っこして歩いたりして、男性が育児に参加しているという雰囲気が印象的でした。そこで、ドイツ以外のヨーロッパの国々では子育ての制度はどのようになっているのでしょうか？

N: はい、フランスではもっと進んだ制度があって、男の人でも合計二週間程度育休がとれるようです。これは労働基準法で守られた制度であり、父親も育児に参加しやすい環境が整っているようです

NT: 二週間ですか？長いですね！

N: そうなんです。では、ここでアフガニスタンではどのようになっているのか、少しお話を聞いてみましょう。Mursal さん、お願いします。

What is the situation regarding gender equality in Afghanistan?

Mu.: (アフガニスタンでの男女平等の状況について話す)

要約: 日本語で

M: Do religious customs and traditions play an important role in Afghanistan? How do they affect gender equality and the rights of women?

Mu.: (イスラム教の影響について話す)

T: イスラム圏では、宗教上暴力を容認していないようですが、コーランについての知識の欠如や教育が行き届いていないことにより間違った解釈が横行しているという現在の状況が生まれているようです。

ヨーロッパでは同じような状況、宗教的圧力はなかったのでしょうか？

N: たしかに、カトリックなどは厳しいイメージもありますが…

M: はい、今は昔に比べて影響力はないようですが、昔はとても厳しいものだったそうです。そもそもなぜヨーロッパで女性解放運動が盛んにおこなわれたかという、宗教的な抑圧がとても長い間強く続いたことも一因になっているようです。

T: キリスト教では、どうしてそんなに女性が抑圧されていたのでしょうか？

M: その根源は、創世記にまでさかのぼることができます。お二人はアダムとイブの話をご存知ですか？

(アダムとイブのスライド)

T: 聞いたことがあります。りんごを食べてしまって楽園を追い出される話ですよね？

M: そうです。一応簡単に説明しておく、アダムとイブは最初の人間とされている男女です。女性であるイブは、男性であるアダムの一部から生み出されたものとされています。イブは後に悪魔の誘惑を受け、楽園を追い出される原因をつくってしまうのです。そのせいもあり、キリスト教圏では女性は「墮落」や「誘惑」の象徴としてみなされてしまうことになったのです。

N: たしかに、キリスト教では魔女狩りなどもあり女性が犠牲となった歴史が多く残っていますよね。

(魔女狩りのスライド)

M: そうなんです。聖女信仰や聖母マリア信仰など、女性が神聖視されるような習慣もあったのですが、圧倒的に抑圧されるケースの方が多か

ったようです。一方日本においては、歴史的にそれほど強い宗教的抑圧がなかった分、「なんとなく」で残ってしまっている男尊女卑的な雰囲気ってありますよね。宗教的な意味だけでなく、日常生活や家庭内にもみられると思うのですが、いかがでしょうか？

T: わかります！私には兄と弟がいるんですが、他の兄弟に比べて「女の子だから」と家事をする割合が多かったように感じます。お二人はいかがですか？小さい頃から同じように家事を手伝っていましたか？

N: はい、わかります！私には妹がいて家事を分担しているのですが、お盆の時とかは家事手伝いに良く駆り出されていましたね。

M: 私もわかります！私は一人っ子で母と二人暮らしなので、必然的に家事はやらなければならないのですが、お盆正月など親戚が集まったときには、従兄弟の男の子たちより、従兄弟の女の子や私がお茶を出したり料理の手伝いをしていました。

T: そこで観客の皆さんにもお聞きしたいのですが、同じように女の子だからという理由で家事の手伝いをしてきた思い出はありますか？よろしければ拍手で教えてください。

(拍手してもらおう)

T: やはりみなさんそうですね。ところで、日本では近年、家庭内暴力の問題が取り上げられてきていますが、イスラム圏ではそれがもっと激しく、女性の人権にかかわる問題にまで発展していると聞いたことがありますよね。

NM: そうですね。そのあたり気になります。

T: では、Mursal さんにも質問してみましよう。Family violence, particularly violence against women and children became a big issue in Japan during the past 10 years. What is the situation in Afghanistan?

Mu.: (アフガニスタンでの家庭内での女性抑圧について話す)

要約: 日本語で

Mu.: (3人に英語で質問。Are there recently any reported cases of human rights violations against women in Japan? (日本では人権にかかわるような強い

女性抑圧はあるのか?)

M: うーん、人権にかかわるような大きな問題か…

T: たぶん今でも、女性はさほど高学歴でなくてもよいという風潮が社会的に残っていますね。

N: そうですね。それが原因となって女性の可能性がつぶされてしまうことは人権にかかわる問題ではないでしょうか？

M: そういえば私立の医学部でも問題になっていましたよね。

N: 私大の医学部が、女子学生や浪人生に不当に傾斜配点をかけて、受験の際に不利にしていたという問題が一時期ニュースになっていましたね。

T: これも人権にかかわるような問題といえるのではないのでしょうか。

M: 考えてみると意外と日本にもあるんですね。

日本にも人権にかかわるような女性抑圧が社会的風潮としてまだまだ残っている。特に教育の場で残っていることに気づきました。

M: あ、名残惜しいですがそろそろ時間のようです。

T: そろそろまとめに入らせていただきますでしょうか。今日のパネルディスカッションをお聞きいただいて、「男だから、女だから」という性別にとらわれず、お互いを尊重しあえる社会について考えていただく、きっかけにしてもらえれば嬉しいです。

M: 私たちは、決して女性が偉いだとか、女性の方が優遇されるべきだと主張したいわけではありません。男女ともに平等で、皆が不当な差別におびえることのない社会にしていけるといいですね。

N: これで私たちのパネルディスカッションは終わりです。ご協力・ご清聴ありがとうございました。

TM: ありがとうございました。

パネルディスカッションは、出演者と観客がともに身近な社会問題を振り返る「きっかけ」の場となり、学生たちの堂々たる進行によって円滑にリラックスした雰囲気の中で時間内に終えることができた。その後の反響で、内容的に

も学生たちの成果を高く評価する声が多く寄せられた。

6. おわりに

「音楽と社会を繋ぐレクチャーコンサート『きっかけ』～マイノリティーを乗り越えて～」は、女性参政権が誕生した1918年11月12日に近い11月10日日曜日に開催された。女性問題を取り上げるにあたり、1919年1月のドイツ初の国民選挙から100年目の記念年にあたる2019年に当公演を開催できたことも幸いに思う。さらに、第一次世界大戦終戦日と当公演2部と3部における別作品関連の死没日とともに11月11日であることから、レクイエムの意を込めて11月に行う意義と使命を強く感じた。

* 本企画にご協力いただいた琉球大学関係者ならびに公演スタッフ、宜野座村文化まちづくり事業実行委員会と新聞・放送局各社後援関係者の皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

参考文献

- Cornelia Bartsch : **Louise Farrenc “Une femme d’un mérit éminent“ aus Anäherung an sieben Komponistinnen Furore Verlag, Kassel 1996**
- Ute Büchter-Römer : **Fanny Mendelssohn-Hensel, Rowohlt Verlag Hamburg 2001**
- Eurostat : **Statistisches Bundesamt Webpage 2016**
- Claudia Finke, Florian Dumpert, Martin Beck :
Verdienstunterschiede zwischen Männern und Frauen/Eine Ursachenanalyse auf Grundlage der Verdienststrukturerhebung 2014
- Louise Farrenc : **Trio pour Piano, Flüte et Violoncelle op.45, Furore Edition 391, Kassel**
- Fanny Hensel : **Tagebücher Breitkopf&Härtel, Leipzig 2002**
- Fanny Hensel : **Fanny Hensel-Mendelssohn Lieder op. 10, Nach Süden (Wilhelm Hensel) Bergeslust (Joseph von Eichendorff), Breitkopf&Härtel, Leipzig 1850**
- Fanny Hensel : **Fanny Hensel-Mendelssohn Lieder op. 7, Nachtwanderer (Joseph von Eichendorff), Bote&Bock, Berlin 1847**
- Fanny Hensel : **Fanny Hensel-Mendelssohn Lieder op. 9, Die Mainacht (L.H.C.Hölty), Breitkopf&Härtel Leipzig 1850**
- Hedda Nier : **GLEICHSTELLUNG “So ungleich ist Hausarbeit verteilt“ Statista, 2019**
- Uwe Henrik Peters : **Robert Schumann 13 Tage bis Eendenich, Ana Publisher 2009, Köln**
- Danielle Roster : **Die großen Komponistinnen-Lebensberichte, Insel Verlag, Leipzig 1998**
- R. Larry Todd : **Fanny Hensel: The Other Mendelssohn, Oxford University Press 2010**
- Eva Weissweiler : **Komponistinnen vom Mittelalter bis zur Gegenwart, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1999**
- Zeit-Online : **Die Stimmen der Frauen, Nov. 2018**
- 山下剛 : 「もう一人のメンデルスゾーン」 未知谷 2006

Drei Komponistinnen im Spiegel der Gesellschaft

Claus Franke

„Die Musik wird für Felix vielleicht Beruf, während sie für Dich stets nur Zierde, niemals Grundbass Deines Sein und Tuns werden kann und soll. [...] Beharre in dieser Gesinnung und diesem Betragen, sie sind weiblich und nur das weibliche ziert die Frauen.“

Dieser Auszug aus einem Brief, den Abraham Mendelssohn im Juli 1820 an seine damals 14-jährige Tochter Fanny schrieb, spiegelt die Situation der kunstschaftenden Frau im 19. Jahrhundert wieder. Es gab keine Einwände, für den Hausgebrauch zu schreiben. Strebte eine junge Frau jedoch nach Anerkennung in der Öffentlichkeit, indem sie ihre Werke herauszugeben beabsichtigte, kam das einer gesellschaftlichen Tabuverletzung gleich. Sie musste kämpfen und verlor meistens.

Das ist das Spannungsfeld in dem sich Clara Schumann, Louise Farrenc und Fanny Hensel-Mendelssohn bewegten. Sie sind die Protagonisten des ersten Teils eines musikalischen Projekts, das unter dem Titel „Kikkake“ am 10. November 2019 in der Garaman-Hall in Ginoza zur Aufführung gelangte. „Kikkake“ bedeutet so viel wie „Anlass“ oder „Aufhänger“. Lieder und Kammermusik von Clara Schumann, Louise Farrenc und Fanny Hensel-Mendelssohn sollten Anlass bieten, über die gesellschaftliche Situation der kunstschaftenden Frau im 19. Jahrhundert nachzudenken.

Veranstalter des Projekts war das Kulturzentrum der Gemeinde Ginoza. Neben einem Ensemble aus professionellen Musikern wirkten drei Germanistikstudentinnen der Ryūkyū-Universität mit. Sie hatten sich bereits im Sommersemester 2019 in einem meiner Seminare intensiv mit der Frage auseinandergesetzt, wie Komponistinnen in einer Gesellschaft leben konnten, die eine aktive künstlerische Tätigkeit nicht zuließ. Ziel des Unterrichts war es, ein eigenständiges Skript zu je einer der oben erwähnten drei Komponistinnen zu verfassen und es bei der Aufführung vorzutragen. Die Studentinnen erhielten im vollbesetzten Konzertsaal herzlichen Applaus für ihre außergewöhnliche Leistung.

Im Anschluss daran leiteten sie in eigener Regie und unter Teilnahme des Publikums eine Paneldiskussion, in der sie einen großen Bogen vom 19. Jahrhundert in die Gegenwart spannten. Dabei wurde unter anderem auch der Frage nachgegangen, inwieweit sich in modernen Demokratien diskriminierende Strukturen erhalten haben. Die Idee zu dem Projekt "Kikkake" entsprang dem Bedürfnis, klassische Musik und gesellschaftlich-aktuelle Themen zu verbinden, um der herkömmlichen Form des klassischen Konzertes einen neuen und zeitgemäßen Anstrich zu verleihen. Nach dem Bühnenprojekt "Rheinbilder" (2018) war "Kikkake" der zweite Versuch, Studenten der Ryūkyū-Universität als tragende Säulen in das Gesamtkonzept eines musikalischen Bühnenprojekts zu integrieren.